



Title	礼文島香深井2遺跡出土石器の使用痕分析
Author(s)	高瀬, 克範; Takase, Katsunori
Citation	北海道大学考古学研究室研究紀要, 1, 17-26
Issue Date	2021-12-06
DOI	https://doi.org/10.14943/105600
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/87909
Type	departmental bulletin paper
File Information	02_1_takase_P17_P26.pdf



礼文島香深井 2 遺跡出土石器の使用痕分析

高瀬 克範

要旨：本研究の目的は、鈴谷文化期が中心的な時期となる北海道礼文町香深井 2 遺跡から出土した剥片石器 43 点、石斧 1 点の機能・用途解明にある。石器使用痕分析法（高倍率法）によって検討した結果、つぎの点が明らかになった。1) 石鏃および尖頭器にはポリッシュが確認されない、2) 搔器には 1 点中 1 点、削器には 19 点中 2 点にポリッシュが認められ、すべて皮なめしに用いられていたと推定される、3) 石斧には 1 点中 1 点に高瀬 2 類のポリッシュが確認されたが、刃部ではなく基部の主面上に分布しており線状痕は不明瞭であった。形態学的に見て横斧の前主面に分布するポリッシュと考えられ、膝柄に着柄された横斧の着柄痕と推定される。本稿で扱った資料には縄文文化やオホーツク文化の資料も混在していると考えられるが、分析結果はすでに明らかになっている続縄文文化前期・縄文・オホーツク文化の石器の利用法を逸脱することなく、むしろそれと整合的である。道北部の離島においても、これまで知られているものと類似した方法で石器が利用されていたと考えることができる。

I. 研究の目的

本研究の目的は、北海道大学文学部附属北方文化研究施設が 1965 年に発掘調査を実施した礼文町香深井 2 遺跡出土石器の利用方法を明らかにすることにある。同研究施設の調査資料のうち、香深井 1 遺跡（調査時は「香深井 A 遺跡」）（大場・大井 編 1976、1981）から出土した資料の使用痕分析については成果をすでに公表している（高瀬 2021b）。そこで、ここでは「香深井 B 遺跡」（大場・大井 編

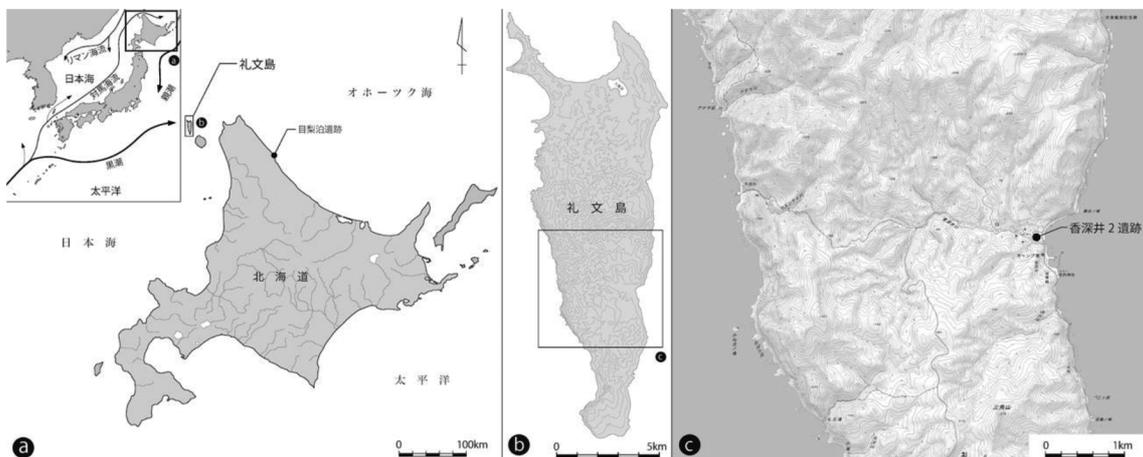


図 1 遺跡の位置

1981、菊池 1981) として報告された現在の香深井 2 遺跡から出土した石器の利用法の解明を目的として、石器使用痕分析を実施する。

II. 分析の対象と方法

(1) 検討対象

香深井 2 遺跡は、礼文島東海岸の香深井川河口付近の遺跡群に属する(図 1)。この遺跡は、1930 年代に名取武光や後藤寿一によって調査され(名取 1933、名取・後藤 1933)、戦後も岡田宏明らが発掘をおこなうなど(泉・曾野 1967)、ふるくから知られてきた。遺跡は、北海道大学文学部附属北方文化研究施設によって 1969～1972 年に発掘調査されたオホーツク文化の代表的な集落遺跡である香深井 1 遺跡(旧香深井 A 遺跡)(大場・大井 編 1976、1981)の北側に位置する標高 10～16m ほどの小規模な台地上に立地する。1965 年、北大の調査チームが土砂採取によってこの遺跡が破壊されつつあることを発見し、土取り中止の申し入れをおこなったうえで、遺跡が残存していた部分について最低限の面積が発掘された。そのため、調査区が細長いが、そのなかで堅穴遺構、ピット、墓の可能性のある遺構が発見された(図 2)。確認された堅穴遺構のうち、少なくとも 1 号 a、1 号 b、2 号の 3 基は堅穴住居と考えられており、規模は小さいが 3 号も住居の可能性が想定されている(菊池 1981)。遺構の時期は、ピット群や炭面(焼土はないが石組みがともなう)をふくめて概ね出土土器の大半を占めている鈴谷式期と考えられ、本稿で取り扱う石器の帰属時期も鈴谷式である可能性が高い。ただし、出土土器には縄文文化、続縄文文化前期の資料のほか、十和田式土器も少数ながらも含まれている点には注意が必要である。香深井 1 遺跡においては、石匙は縄文文化期の資料がオホーツク文化期の層に混入したものと評価されているが(大井 1976:76)、香深井 2 においても石匙は 1 点出土している。こうした状況から、本稿で取り扱う石器には鈴谷式期以外の時期の石器が混在している可能性は否定できない。なお、墓の可能性が考えられている平面形が長方形を呈する土坑からの遺物の出土はない。

香深井 2 出土資料は北海道大学総合博物館に保管されているが、本研究ではこのうち剥片石器および磨製石斧の分析を実施する。報告(菊池 1981)によると、これらの石器は総数で 66 点が出土した。このうち、尖頭器 6 点、削器 14 点、石斧 2 点の計 22 点の資料が礼文町に長期貸出中となっており、これらをのぞいた 44 点がここでの分析対象となる。

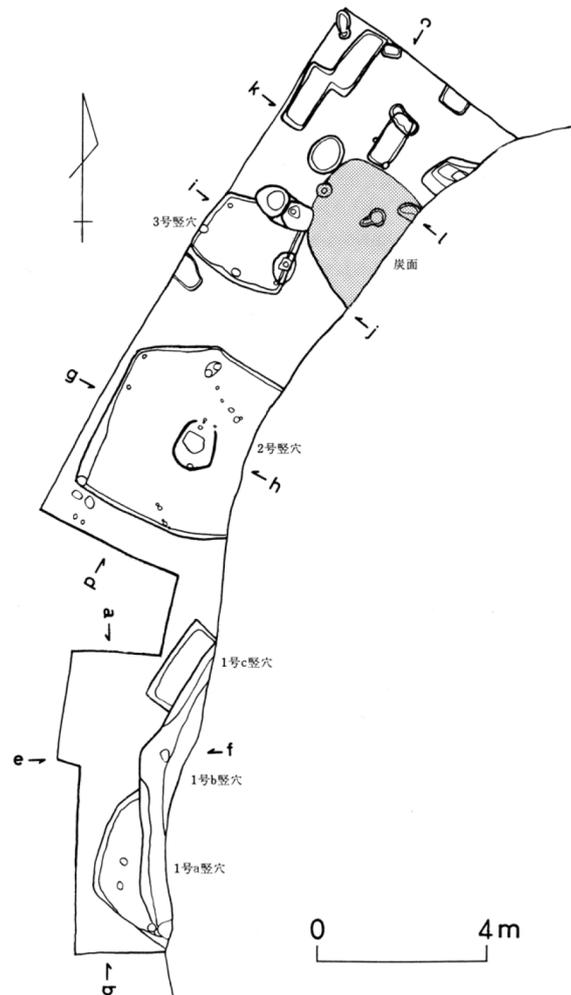


図 2 香深井 2 遺跡(菊池 1981)

表1 検討対象の器種と出土層位

出土位置 層位	石鏃	尖頭器	尖頭器?	搔器	削器	石匙	石斧	計
1号b竪穴 埋土		3		1	3			7
2号竪穴 埋土	1	4	1		1			7
3号竪穴 埋土		4			2			6
ピット1 埋土					1			1
ピット3 埋土					1			1
ピット5 埋土	1	1						2
炭面 埋土	1	1						2
遺構外 表土・攪乱	3	3			10	1	1	18
計	6	16	1	1	18	1	1	44

表2 検討対象資料に利用されている岩石

	頁岩	黒曜石	チャート	メノウ	砂岩	シルト岩	安山岩	輝緑岩	計
石鏃	1		1	2		1	1		6
尖頭器	5		1			4	6		16
尖頭器?		1							1
搔器	1								1
削器	11	1	1	1	1	1	2		18
石匙	1								1
石斧								1	1
計	19	2	3	3	1	6	9	1	44

表3 使用痕光沢面・線状痕が確認された資料一覧

出土位置	層位	報告書図番号	器種	岩石	ポリッシュ	線状痕	被熱痕跡
遺構外	表土・攪乱	第530図9	削器	シルト岩	E2	直交	なし
遺構外	表土・攪乱	第530図11	石斧	輝緑岩	高瀬2類(基部)	不明	なし
遺構外	表土・攪乱	第534図7	削器	黒曜石	OB-E, OB-I	直交	なし
1号b竪穴	1号b竪穴埋土	第548図7	搔器	頁岩	E2	直交	なし

表1は、遺構・層位ごとに検討対象の数を集計した結果である。器種分類は報告書のそれにしたがったが、銚先鏃や槍とされているものは尖頭器に統一し、削器のうち素材剥片の外周や短辺に比較的急角度で二次加工が加えられているものは搔器にするなど、一部を改変した。表2は、検討対象の岩石の類を示している。岩石の分類も基本的に報告書の情報にしたがっているが、報告における詳細な分類、たとえば珪質頁岩、硬質頁岩、砂質頁岩などは頁岩に統一するなど大括りの分類にまとめたうえで表2に提示している。

(2) 分析の方法

石器使用痕分析のなかの高倍率法を採用した (Keeley 1977、 1980)。石器に付着した油脂などをエタノールによって除去したうえで、落射照明付き金属顕微鏡 (Olympus BX-FM) によって 100~500 倍で資料表面を観察し、必要に応じて顕微鏡用デジタルカメラ (Wraymer NT1000) で写真撮影を行った。ポリッシュ (使用痕光沢面) の分類は、自らの石器の使用実験により追認できることを確認したうえで、黒曜石製石器については御堂島 (1986、 2005)、黒曜石以外の岩石製の剥片石器については梶原・阿子島 (1981)、御堂島 (1988)、阿子島 (1989) の研究にしたがった。また、石斧の使用痕光沢面は、世界的にみてもっとも充実した使用実験結果にもとづく高瀬 (2007) の成果と対比した。複数の種類の

表 4 亦稚貝塚、利尻富士町役場遺跡出土剥片石器の組成

遺跡	主な 帰属時期	石鏃	尖頭器	削器・搔器	石錐	使用痕ある剥片 「剥片石器」	石斧	叩石	石錘	砥石	石皿	計
亦稚貝塚 住居址 床面 (岡田ほか1978)	鈴谷式期	3 (20.0%)	5 (33.3%)	7 (46.7%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	15 (100.0%)
利尻富士町役場前 1994年度調査 (内山ほか1995)	鈴谷式期～ 刻文期	65 (25.0%)	37 (14.2%)	90 (34.6%)	3 (1.2%)	32 (12.3%)	20 (7.7%)	2 (0.8%)	3 (1.2%)	8 (3.1%)	0 (0%)	260 (100.1%)
利尻富士町役場前 2009年度調査 (山谷ほか2011)	鈴谷式期～ 沈線文期	366 (40.0%)	91 (9.9%)	291 (31.8%)	6 (0.7%)	4 (0.4%)	52 (5.7%)	5 (0.5%)	36 (3.9%)	61 (6.7%)	3 (0.3%)	915 (99.9%)

ポリッシュが確認できる場合はそれらを併記したが、先に記載されているものが主、次に記載されているものが副となるものである。石斧に関係する名称は、佐原（1994）にしたがう。

III. 分析結果

44 点の検討対象資料のうち 4 点の資料にポリッシュや線状痕がみとめられた。これら使用痕が確認された資料について、分析結果を表 3 に示した。また、使用痕の分布範囲と顕微鏡写真を図 3、4 に示した。使用痕が確認されたのは、削器 2 点、搔器 1 点、石斧 1 点である。削器および搔器には、E2 タイプ光沢と石器縁辺に対して直交方向の線状痕が確認された。また、黒曜石製の削器 1 点には、OB-E、OB-I タイプ光沢と、やはり縁辺に対して直交方向の線状痕が確認された。石斧には、刃部には使用痕光沢面が認められなかったが、基部に高瀬分類の 2 類の使用痕光沢面が確認された。ただし、線状痕は明確には確認されなかった。資料数が少ないが、使用痕の検出率は搔器と石斧で 100%（それぞれ 1 点中 1 点）、削器で 10.5%（19 点中 2 点）である。それ以外の石鏃、尖頭器については、まったく使用痕が確認されなかった。

IV. 考察

(1) 石器の組成

オホーツク文化の遺跡では、石鏃・尖頭器といった狩猟具が剥片石器の器種のうち 8～9 割以上を占めるのが通例である。こうした傾向は、石器製作をほとんど行っていない地域でとくに顕著であるが（高瀬 2021a）、比較的積極的に石器製作をおこなっている香深井 1 でも石鏃・尖頭器が剥片石器の器種の 80%以上を占めている（大場・大井 編 1976、1981）。しかし、香深井 2 においては石鏃・尖頭器の比率は 5 割にとどまり（44 点中 22 点）、それ以外の削器・搔器を中心とする加工具の比率が高い。続縄文文化の石器組成では、加工具が狩猟具に比肩する割合で組成されることが多いことから（高瀬 2020a、2020b など）、香深井 2 の石器組成はオホーツク文化よりも続縄文文化のそれに近く、これには香深井 2 遺跡出土資料の中心が鈴谷式期に位置づけられることが関係していると考えられる。

現時点で、純粋な鈴谷式期の石器組成を把握することは難しいが、出土土器からみて鈴谷式期の石器が一定程度含まれていると考えられる石器資料はある（表 4）。利尻島の亦稚貝塚（岡田ほか 1978）では、鈴谷式に位置づけられる住居址が調査された。必ずしも資料数が多いわけではないが、床面から出土した石器の約半数が狩猟具、のこりが加工具である。加工具のなかには石匙が 2 点含まれている点には注意が必要ではあるが、これらを除いたとしても狩猟具の占める割合は 6 割程度にとどまる。刻文・貼付文・

沈線文期のオホーツク文化とくらべて、狩猟具の比率は相対的に低いと考えることができよう。刻文・貼付文・沈線文期の石器との区別が難しいが、鈴谷式期の石器が含まれていることが確認できる利尻富士役場遺跡（内山ほか1995、山谷ほか2011）でも、剥片石器のツール中に占める狩猟具の割合は5～6割程度である。相対的に加工具の比率が高い鈴谷式期の石器の存在が、全体として狩猟具の比率を押し下げる効果をもたらしていると考えられる。このような他の遺跡の状況、および香深井1との石器組成の違いを考慮すると、狩猟具と加工具がほぼ拮抗する香深井2遺跡出土石器は、その大部分が出土土器の大半を占めている鈴谷式期の所産であると考えられることができるであろう。

(2) 剥片石器の利用法

石鏃・尖頭器にはまったく使用痕が認められなかったが、これは縄文やオホーツク文化に限らず先史時代に一般的な傾向である。これら狩猟具が他の用途に転用された場合は使用痕光沢面が確認されるケースもないわけではないが（高瀬2018、2021aなど）、本研究の検討対象のなかにはそうした資料はなかった。削器には、2点の資料（ともに表土・攪乱層出土）に直交方向の線状痕をともなうE2タイプ光沢が確認された（図3:1、図4:1）。実験結果をふまえると、乾燥状態にある動物皮の削りもしくは掻き取りの動作で利用されたものと推定される。黒曜石製の削器1点には直交方向の線状痕をともなうOB-EタイプおよびOB-Iタイプが認められ、この資料も同様の用途に用いられたものと推定される。したがって、削器が皮なめし具であった蓋然性はきわめて高い。ただし、OB-Iタイプが確認された黒曜石製の削器に関しては、乾燥皮だけでなく、やや水分を含んだ状態の皮も加工された可能性がある。

1号b堅穴の埋土から出土した搔器1点にも、刃部に直交方向の線状痕をともなうE2タイプ光沢が確認された（図4:2）。削器と同様の被加工物と運動方向が想定され、やはり皮なめし具と考えられる。これら皮なめし具と考えられる資料については、いずれの資料でもポリッシュの発達程度がそれほど高いわけではない。よって、これらの道具が重度に使い込まれるほど皮なめしが集中的に行われていたことを示す証拠はえられていない。また、直交方向の線状痕のみが確認されたため、皮の切断にどのような石器が利用されていたのかは不明である。さらに、鈴谷式期においても骨角器がさかんに利用されていることが知られているにもかかわらず（前田2002、右代2003など）、本研究では骨角器製作に利用されたと考えられる石器を確認することができなかった。香深井2の報告では、鈴谷文化期に鉄器が利用されていたことが推定されているが（菊池1981:647）、本研究では剥片石器の利用内容が皮革加工を中心とする特定の目的に限定されていることが確認された。言い換えれば、それ以外の作業は石器以外の道具が利用されていた可能性が高い。資料数が少ないことから現時点でこれ以上掘り下げることができないが、石器の利用状況からみても当時の鉄器利用は一定程度裏付けられる。

(3) 石斧の利用法

基部に高瀬2類の使用痕光沢面が確認された石斧1点（表土層出土）は、長さが12.7cmと小型ではあるが、分厚い器体を有するものである（図3:2）。刃部に、若干の欠損もしくは再加工の痕跡がみられる。実測図からは判別しにくいだが、刃部の作出方法からみて、側面図の右側の面（b面とよぶ）が前主面となる片刃石斧と考えられる。その反対側の主面（a面と呼ぶ）は主面が丸みを帯びており、こちらに膝柄の台部を装着することは難しい。もちろん、直柄に装着して縦斧として利用することも不可能ではない

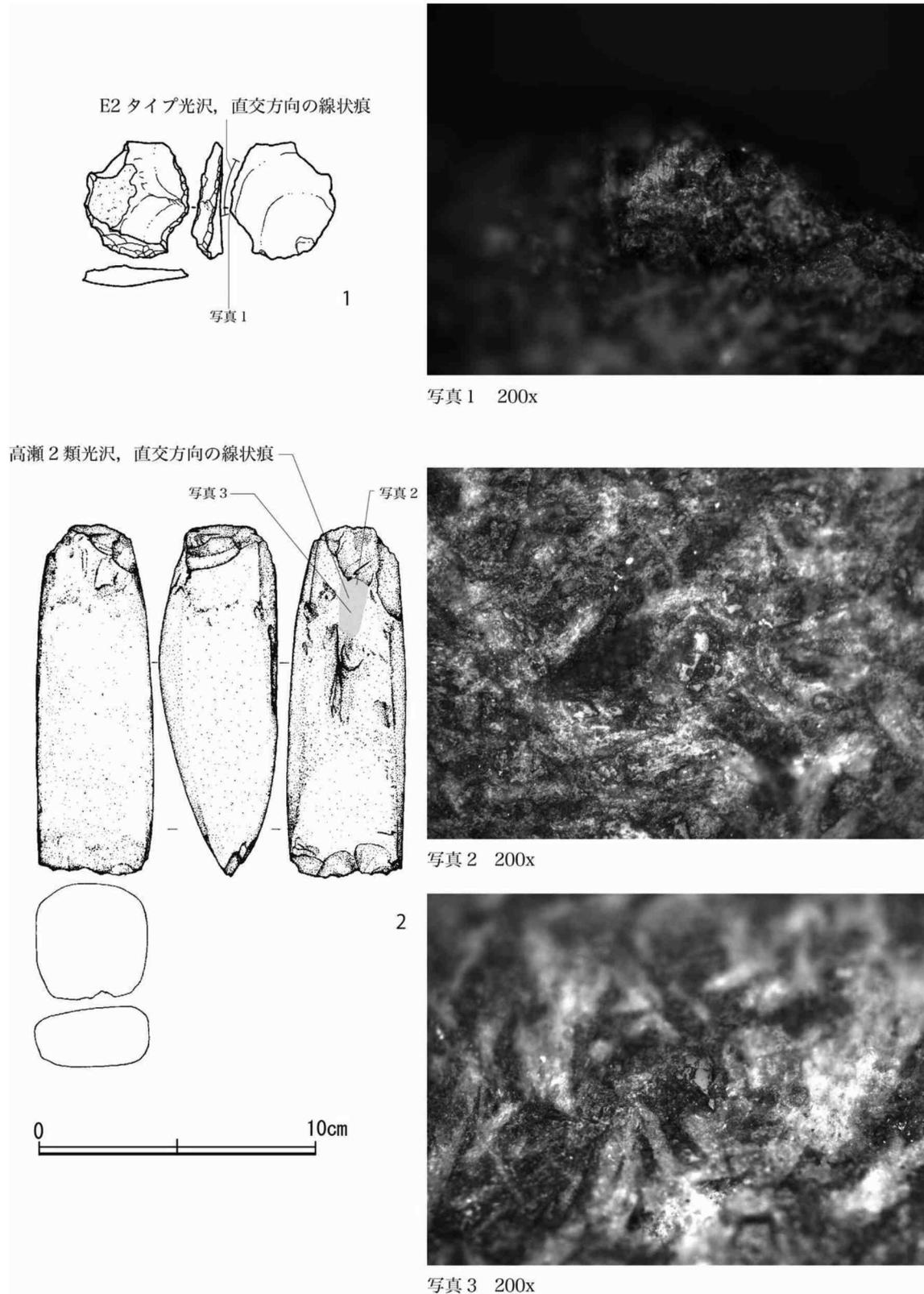


図3 香深井2 遺跡出土石器と使用痕(1) [菊池 (1981) をもとに作成、すべて 200 倍で撮影、顕微鏡写真の横幅は約 0.9mm]

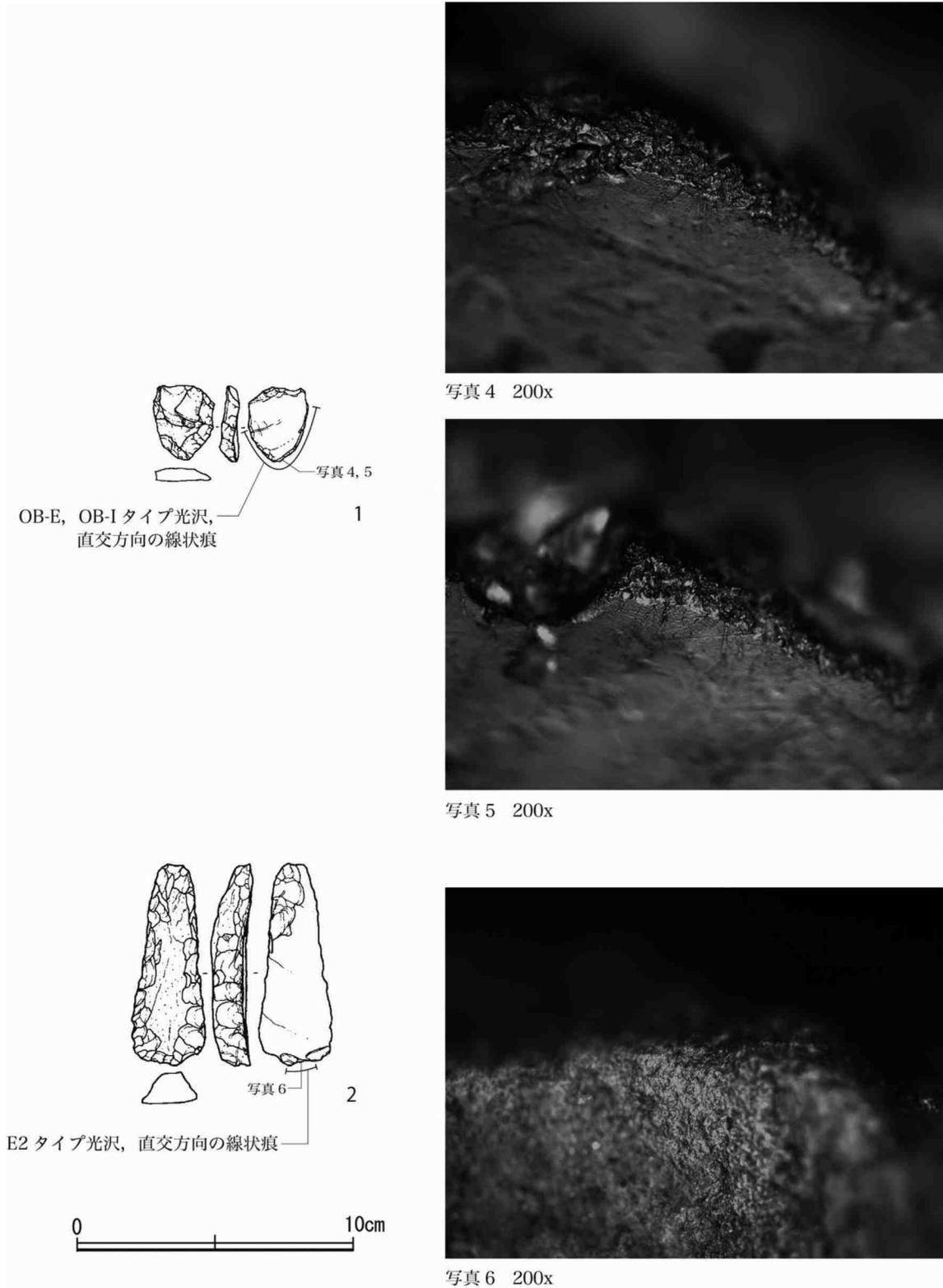


図 4 香深井 2 遺跡出土石器と使用痕(2) [菊池 (1981) をもとに作成、すべて 200 倍で撮影、顕微鏡写真の横幅は約 0.9mm]

が、刃部はb面に作出されていることから、b面を前主面として膝柄に装着された横斧として利用されたことが形態学的に予測される資料である。

続縄文文化やオホーツク文化の分厚い石斧には、稲生(1937)のいう柱状、つまり主面と側面のなす稜線が比較的明瞭で、断面が四角形を呈するものがある。報告でも、この石斧はサハリンのスタラドブスコエII遺跡(Васильевский и Голубев 1976)にも類例のある柱状石斧と評価されているが(菊池 1981: 647-648)、稜線はやや丸みを帯びている。続縄文文化やオホーツク文化では、このほかにも断面が楕円形もしくは円形を呈する太型蛤刃石斧に類似する石斧もあるが(高瀬 2008、2017)、多くの場合、刃部は両刃である。この点で、図3:2の片刃石斧は必ずしも一般的な石斧とはいえないが、やはり続縄文～オホーツク文化に帰属する可能性が高いと考えられる。

ポリッシュの分布は、b面を前主面とする横斧としての予測を支持している。b面の基部に高瀬2類が分布しているが、a面には使用痕光沢面が分布していないからである(図3:2)。このポリッシュは石斧による伐採実験で刃部だけではなく基部にも頻繁にみとめられ、少なくとも木との接触で生じることは確実である(高瀬 2007)。明るさや表面の滑らかさではBタイプと類似するものの、ポリッシュの断面がそれほど丸みを帯びずに平坦で、光沢面の境界は比較的明瞭である。実験と同じように、線状痕が不明瞭であること、基部の高所に分布していることから、b面基部に確認された高瀬2類光沢は着柄痕と考えられる。横斧の場合、刃部は後主面側でポリッシュがより発達するが、着柄痕は前主面側で確認されることが圧倒的に多い(斎野 1998、高瀬 2008)。実験結果も、b面を前主面として膝柄に装着された横斧としての推定と整合的である。

続縄文文化の片刃石斧は、木の伐採・加工や皮革加工に用いられていたことがこれまでの使用痕分析からすでに明らかになっている(斎野 1998、高瀬 2008、2021b)。刃部にはポリッシュが認められなかったため、残念ながらこの石斧が何に対して利用されたのかを示唆する証拠はえられなかった。

V. 結論

香深井2遺跡から出土した主として鈴谷文化期に属すると考えられる剥片石器43点、石斧1点を、高倍率法の石器使用痕分析法によって検討した結果、以下の点が明らかになった。

- 1) 石鏃および尖頭器には、ポリッシュは確認されなかった。
- 2) 搔器には1点中1点、削器には19点中2点にポリッシュが認められ、すべて皮なめしに用いられていたと推定された。
- 3) 石斧には1点中1点が高瀬2類のポリッシュが確認された。ただし、刃部ではなく基部の主面上に分布しており、線状痕の方向は不明瞭であった。木製の膝柄に着柄された横斧の着柄痕と考えられ、この推定は形態学的にも支持される。

本稿の分析結果は、すでに明らかになっている続縄文文化やオホーツク文化の石器の利用法を逸脱することなく、むしろそれと整合的であった。本稿で取り扱った資料の多くが鈴谷式期に属するものと考えられるが、この時期の道北部の離島においても、これまで知られている方式と類似した方法で石器が利用されていたと考えることができる。ただし、検討することができた資料数は必ずしも多くはないため、今後、鈴谷式にともなう可能性が高いべつの石器群を対象とした分析を通して、この時期の資源利用行為の内容や石器と鉄器の使い分けなどについて、さらに詳しい検討を実施する必要がある。

謝辞

本研究の実施にあたって北海道大学総合博物館の江田真毅氏に大変お世話になった。記して感謝申しあげる。

引用文献

- 阿子島香 1989『石器の使用痕』ニュー・サイエンス社
- 泉 靖一・曾野寿彦 編 1967『オンコロマナイ』東京大学出版会
- 稲生典太郎 1937「北海道オホーツク海沿岸出土石器の一部に就て」『史前学雑誌』10(1): 9-21 [再録: 稲生典太郎 1997『北方文化の考古土俗学』岩田書院]
- 右代啓視 2003「オホーツク文化の土器・石器・骨角器」野村崇・宇田川洋 編『続縄文・オホーツク文化』:134-161、北海道新聞社
- 内山真澄・西谷栄治・新美倫子・熊木俊朗 1995『利尻富士町役場遺跡発掘調査報告書』利尻富士町教育委員会
- 大井晴男 1976「資料の分類について(自然遺物を除く)」大場利夫・大井晴男 編『香深井遺跡 上』:68-100 頁、東京大学出版会
- 大場利夫・大井晴男 編 1976『香深井遺跡 上』東京大学出版会
- 大場利夫・大井晴男 編 1981『香深井遺跡 下』東京大学出版会
- 岡田淳子・梶田光明・西谷栄治・西本豊弘 1978『亦稚貝塚』利尻町教育委員会
- 梶原 洋・阿子島香 1981「頁岩製石器の実験使用痕研究ーポリッシュを中心とした機能推定の試みー」『考古学雑誌』67(1): 1-36
- 菊池俊彦 1981「香深井B遺跡」大場利夫・大井晴男 編『香深井遺跡 下』:567-652、東京大学出版会
- 斎野裕彦 1998「片刃磨製石斧の実験使用痕分析」『仙台市富沢遺跡保存館研究報告』1: 3-22
- 佐原 真 1994『斧の文化史』東京大学出版会
- 高瀬克範 2007「実験磨製石斧の使用痕分析」『人類誌集報』2005: 65-113
- 高瀬克範 2008「続縄文期前半における磨製石斧の機能・用途に関する一考察」明治大学考古学研究室 編『地域と文化の考古学II』: 327-344、六一書房
- 高瀬克範 2017「柳田國男旧蔵考古資料における石器の使用痕分析」『国立歴史民俗博物館研究報告』202: 137-156
- 高瀬克範 2018「北海道千歳市キウス4遺跡出土石錐の使用痕分析ー機能・用途推定と資源管理のあり方に関する検討ー」『国立歴史民俗博物館研究報告』208: 45-82
- 高瀬克範 2020a「続縄文文化における剥片石器の利用法ー札幌市内から出土した有茎スクレイパー以外の器種の使用痕分析」『丘珠縄文遺跡年報』2: 33-44
- 高瀬克範 2020b「有茎スクレイパーの利用法ー続縄文文化の歴史的評価に対する使用痕分析の貢献ー」御堂島正 編『石器痕跡研究の理論と実践』:247-268、同成社
- 高瀬克範 2021a「目梨泊・ホロベツ砂丘遺跡出土石器の使用痕分析」『枝幸研究』12: 13-29
- 高瀬克範 2021b「北海道島北部におけるオホーツク文化の石器利用ー礼文島香深井1遺跡出土石器の使用痕分析ー」『考古学研究』68(2): 43-61
- 名取武光 1933「利尻・礼文両島に於ける考古学的調査報告」『史前学雑誌』5(3): 151-152
- 名取武光・後藤寿一 1933「利尻・礼文島紀行」『蝦夷往来』11: 206
- 前田 潮 2002『オホーツクの考古学』同成社
- 御堂島正 1986「黒曜石製石器の使用痕ーポリッシュに関する実験的研究ー」『神奈川考古』22: 51-77

御堂島正 1988 「使用痕と石材ーチャート、サヌカイト、凝灰岩に形成されるポリッシュ」 『考古学雑誌』 74(2): 1-28

御堂島正 2005 『石器使用痕の研究』 同成社

山谷文人・内山幸子・江田真毅・赤沼英男・高橋利彦・蔵元秀一・諸久嶺忠彦・石田 肇 2011 『利尻富士町役場遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 利尻富士町教育委員会

Васильевский, Р. С., В. А. Голубев 1976. *Древние Поселения на Сахалине, Сусуйская Стоянка*. Новосибирск.

Keeley, L. H. 1977. The Functions of paleolithic flint tools. *Scientific American* 237(5): 108-126

Keeley, L. H. 1980. *Experimental Determination of Stone Tool Uses: A Microwear Analysis*. University of Chicago Press, Chicago.

Use-wear analysis of stone tools from the Kafukai 2 site, Northern Hokkaido

TAKASE Katsunori

Abstract: In this study, we conducted the lithic use-wear analysis (high-power approach) to reveal use of stone tools from the Kafukai 2 site, Hokkaido, Northern Japan. Materials examined in this study are forty-three chipped stone tools and a polished stone adze preserved in Hokkaido University Museum. Artifacts are mainly assigned to the Susuya Culture (the Late Epi-Jomon or the initial phase of the Okhotsk Culture) although several artifacts of the Jomon and the Middle-Late Okhotsk Cultures are also included in the collection. As a result of the analysis, use-wear polish and striations could be seen on an end scraper and two side scrapers, whereas no use-wear polish distributed on arrowheads and points. Types of use-wear polish (E2, OB-E, and OB-I types) suggest that an end scraper and side scrapers were used for tanning hide. While there was no microwear on the edge of a stone adze, it had the use-wear polish closely related to wood-working on the surface of basal portion. This is the hafting trace suggesting that the stone adze was used for processing wood in combination with a wooden folded haft. Generally, use of stone tools from this site is common with that of the Jomon, Epi-Jomon, and Okhotsk Cultures, confirming that similar prehistoric stone tool use can be seen in remote islands in Northern Hokkaido as well.